

昭和二十四年七月二十三日  
第四十一号  
第三種郵便物認可  
行(毎月一回・十五日発行)

(通第二〇四号)

# 慈光

第十八卷 第五号

## 目

寂靜と応現(一)……………近角常観……………(1)

親鸞聖人と私……………川畑愛義……………(6)

◎ 人と法について……………榊原徳草……………(9)

63.7.16

次 仏かねてしろしめして……………松村繁雄……………(15)

法蔵の四十八願(二)……………花田正夫……………(17)

# 寂 静 と 応 現

(二)

## 近 角 常 観

### 一〇 彼の一生は

こは今日は色々の感想を言うことになるが、以前から私の友人——大学でも一緒に居て、殊に卒業後、事を共にして来た真岡湛海君なる人。伊勢高田派の観学院の長をして居られた人であるが、私は久しく遇わなかつた。今夏讃岐に行くとき、あとでその方も見えるという話なので、私は丁寧で紹介をして来ておいた。ところがはからずも八月五日に、その方が亡くなってしまわれたのである。私共の年輩の方で、ことに私とは同心一体といわんか、兄弟の如くして働いて来た間柄である。然るにその方が亡くなられたと聞けば、何とやら  
自分にも迫つて来たような感じをして居たのであった。ところが聞無しにかく子供が死に、ことにそれが法性常樂の境を示してくれたとなる時は、十数年前長女を失った時の感じとは違い、何だか自分にも亡命の時が来てあつたのが、自分になり代つてはかなくなつたのではあるまいかと

よりの凡情を起すまでに思うことである。

マア愚痴のありだけを聞いて頂けば、その子が余りに私によく似てた。形といい所作までがよく似ていると人の言うて下さるを聞き、親は馬鹿な者、定めてこの子が生長の後、私のやることでもするようになるのではないかと、思うて居つたのが、かえつてこちらがのこり、向うが先に往つたとしてみると、何といわんか、これは私に、こうやれあゝやれと、示していつてくれたのではないか。かく思うと近頃年寄りていささか隠居気味で居つた奴が、又一つやらして貰わんならぬかとようにまで思いますことである。マア様々な導きをのこして行つてくれた。故に「あれが生きててこうもあれば」と思う方の感はずだすくないのである  
あきらかに、  
彼の一生は私を導く可く現れて来て、完全な一生を終えて還つたものと、思う方の感じが、深いのである。

### 一一 無垢莊嚴光

そこで先きいふ、今年の求道会では『証卷』を話し、西方寂靜無為の樂には、畢竟逍遙として有無を離れたり大悲、心に薫じて法界に遊ぶ。分身して物を利すること等しくて殊なること無し。云々（証卷善導大師文）  
この広大なる真実証のさとり境界を説いてあると同時にその界に往かれた浄土往生の菩薩の方々が、このたびに衆生済度のために再び人生に姿をあらわし、我々に種々の手引きをして下さるといふ、所謂  
還相回向の菩薩のことを説いてあるのが『証卷』の大部分である。それは夏の時皆様が気をつけられたかどうか。たとえはその一ヶ所を拝読して見ると  
一には一仏土に於いて、身動揺せずして、十方に遍す。種々に応化して実の如く修行して、常に仏事を作す……ひとたび極樂界に生れた者は、その仏土に於いて再び動かぬ。しかも種々に人生に応化の身を現じて常に仏事をして下さるとである。

……偈に、安樂國は清淨にして、常に無垢輪を転ず。化仏菩薩は日の須弥に住持するが如きの故にとのたまえり。諸の衆生の淤泥華を開くが故にとのたまえり……  
無垢輪は煩惱の垢なき法輪である。即ち安樂國は清淨にしてその法輪を転ぜられる。化仏菩薩はそれより現れて人生

に示現し、種々に化益して下さる有様は、日の須弥山を中心として行道するが如く、安樂國土を中心として十方世界にあらわれて下さるのであるとである。

……八地己上の菩薩は常に三昧にあつて、三昧力を以て身本所を動ぜずして、能くあまねく十方にいたつて、諸仏を供養し、衆生を教化す。無垢輪とは仏地の功德なり  
仏地の功德は習気煩惱の垢まします。仏諸の菩薩のために常にこの法輪を転ず。諸大菩薩また能くこの法輪を以て一切を開導して、暫時も休息なけん。故に常転といふ。法身は日の如くして、応化身の光、諸の世界に遍するなり。……

日光あまねきが如く、応化身を現じて済度して下さるお力は、十方世界にあまねく及んで下さる。——  
……日と言ふは未だもつて不動を明かすに足らず、復須弥に住持する如しと云ふ。……  
併し目というただけでは、身本処を動ぜずして、化益して下さるのである様があらわれぬから更に日の須弥に住持するが如しと云われたのである、との註釈である。

……淤泥華とは経に言わく、高原の陸地には蓮華を生ぜず、卑湿の淤泥にはいまし蓮華を生ず。これは凡夫、煩惱の泥の中にあつて、菩薩のために開導せられて能く仏の正覺の華を生ずるにたとふるなり。……

こは即ち私共、子供が可愛いとか、あゝこゝ愚痴が止まぬ恩愛煩惱の泥の中に、しかもそれを憐み捨てぬとのお慈悲を聞く一念に、仏正覚の華はこの恩愛煩惱の中に開いて下さる。即ち「高原の陸地には蓮華を生ぜず、卑湿の淤泥にいまし蓮華を生ず」である。「和讃」には

恩愛はなはだちがたく 生死はなはだつき難し  
念仏三昧行じてぞ 罪障を滅し度脱せし

この恩愛生死絶ち難き胸の中に、この断ち難きをあわれみ見て下さる御真実一つを頂いて、その者が安らかに度脱を蒙る。如何にも泥中蓮華を生ずる様である。

……まことに夫れ三寶を紹隆して、常に絶えざらしむ。

二には彼の応化身、一切の時、前ならず、後ならず、一心一念に大光明を放つて、悉く能くあまねく十方世界に至って、衆生を教化し、種々に方便し、修行所作して、一切衆生の苦を滅除するが故に。偶に、無垢莊嚴光、一念及び一時に、あまねく諸の仏会を照らして、諸の群生を利益する故にとのたまえり。上に不動にして至ると言えり。或は至るに前後あるべし。この故に一念一時無前無後と言えりなり。云々（以上証卷論註文）

今、我が子のことを『証卷』に示されてあるこれに引き當てて言うは、如何に信仰上とて、凡夫として勝手すぎるよりにある。又

わしくないので相談に来たところ云うのであった。

私「平日あれ程信じて居られた人が、どうしてそんなに迷われたか」というと、「イヤ自分は子供をよくしたい一念ですから」と言うことである。

私「何故またそんなことでおおると思われたか？」「イヤ沢山の実例がありますから」と、こういう返事である。私「それはおかしい。たとえなおられたところ、此方から快くして欲しいと頼む、此方のはからいでなおると思ふか」と。「イヤ諸仏、菩薩は阿弥陀仏の分身であらせらるるから、分身として手を合すはよいかと思つた」と私「それは非常な間違いである。全体、真実に諸仏を阿弥陀仏に帰するのは、諸仏が本地阿弥陀仏に帰せらるるからである。諸仏は阿弥陀仏の分身であるなど、そんなことに迷うのでない。結局本地阿弥陀仏の恵みを頂けば、諸仏の本意もその本仏のお慈悲を知らせて下さる外にないのだから、本地阿弥陀仏の恵みに随うそれ一つとなるのである。それに貴方の迷われたのは、第一貴方が自分の子供の病氣をよくしたいと、自分の思惑を主とし、自分の思惑通りに、神や仏を自分に従わせようとすることから、このこちらの心の思惑が間違つて居るのだという、ここに氣をつけなくてはならぬ。我々があゝこゝ思う、わが心の

私も存命中にはそんなこと思わなかつた。が今に於いては子供の一生は私を導いてくれるための無垢莊嚴光であつたと私としては深く信ぜしめられて居ることである。

まだこの外に、今年度の講本の処には、慈悲門、智慧門方便門その外様々の方面から、還相廻向の菩薩が、種々の姿に示現し、導いて下さることが云うてある。私にしては即ち亡児がひとえにその意味で出て来てくれたものであつたと考えることなのである。

### 一二 自分を捨てて仏に随う事が難い

こはなはだ所感を申述べることが多くなつたが、なおその前後にわたり、有縁の方に話を聞いて頂いたこと切り無しであつた。殊に最近、遠地より、又近くの方で病氣、または私同様に子供を失つて聞きに来て下さる方が甚だ多かつたのである。それについて

人間は自分を捨てて仏に随うということが甚だ難い。先達でも或る遠方から態々上京せられた方が言われるのは、自分の子供が長らく病氣で福岡大病院の小児科入院させて居つたが、腺病質の腹水とかいう病氣で容易になおらぬ、手間が掛つて困つておつた。すると大阪から来た人が、大阪によい精神療法があるからやれと勧められて、大阪へ連れて来ると神様を拜む療法である。この方はかねてより信仰を聞いて居られた人であるが、どうもそれは思

愛着で、子供の病氣がよく出来得そうに思う、そこに間違があることに目をつけねばならぬのである。

### 一三 信順隨順の意義

こは必ずしも無常のことのみに限らず、人生のことすべてが「自分は斯う考える斯くしなくてはならぬあゝこゝ」と、

何処までもそれを立てて行く、それで間違つて行く、そこに注意しなくてはならぬ。先ず近頃の

生活上の問題、社会上的の問題、思想問題、労働問題、世間百般の問題、みな自分の思惑でやり通そうとする、そこに間違が起つて居るのである。処が、それが

聖人の仰せには、善悪の二つ総してもて存知せざるなりその故は、如来の御ころによしと思召す程に知りとおしたらばこそ、よきを知りたるにてもあらめ。如来のあしと思召す程にあしさを知り通したらばこそ、あしさを知りたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわしますとこそ、仰せはそうらいしか（歎異鈔、結文）

仏でないのだから、本当の善し悪しは我々にはわからぬ。しかるに我々「斯うしたらよかつた、あゝ出来たらよかつた」は、自分の思惑を主にして、

仏が我々の業報、因縁を見て下さることは分らぬから出る言葉となる。故にそういうようにあゝ斯う思う、それが間違いと、ここが釘の打ち処となる。これがないと「けれども斯うしたい／＼」と何時までも——それは、そうしたいも、そうならぬが実人生である。極言なれども、今の方の如く、何とも分らぬものの前に、頭を下げて祈るようなことが何処から来るか。何とも言えぬ愛着から出て来るのである。

処がまた真宗の人は、それが間違つて、現世祈祷をしてはならぬからせぬと考えている。ならぬからせぬではない、そういうことをするのはいらざる計らいになるからせぬのである。

処がまたここまで言う、と、そういうように、思うようにならぬままに捨てて置くのでは安心がされぬ、と思う人があるかも知れぬ。しからばそういうように結局何処までも思うようにならぬ、仕方のない人生のことに問題は行き詰まる。しからば、そういうように無明の暗に迷うて、果てしなき仕方なき様であることを憐み給いて、その者をお見捨てなき大悲の真実は、その者を恵み、導きその永劫の闇黒、苦悩を何処までもなごめ、救わんとある仏の大悲大悲である。故に私、その方に申した。

「貴方、このお心に任かすれば、その思召に腹ふくるる

故、生殺与奪よつたを知ろしめすところにまかせて、その中から安んぜさせて貰うことが出来るでないか」と。  
斯く我々のして見ようなきをしろしめす大悲の真実は、その者を何処までも／＼とのお慈悲故、

本願力にあいぬれば、むなくすぐる人ぞなき  
功德の宝海みちみちて、煩惱の濁水へだてなし。  
如何にして見ようなき者も、その御真実に腹ふくれて、私の計らいで「あゝしよう、斯うしよう」の思いが無くなり、「どうなるうが、斯うなるうが」となったところが、信順随順である。故にここに至ってはじめて心の自由平安を得させて貰うことになる。

考え来る時は、即ち子供はそういう味わいをこのたびは私に味わい知れと気をつけに来てくれた仏の使であつた。

夢の世に仇にはかなき身としれと

おしえてかえる子は知識なり

いつも皆様を慰めた言葉は、今度はかえつて此方を慰めてくれる言葉となつたわけである。かくてお慈悲のましまさん限り、彼土で待ち受けて居てくれることと思わせて貰うことである。併し一言申せば、お慈悲の故に充分満足させられて、何やら人情としては遠いようであるけれども、『浄土論』の中に、還相回向の菩薩がこの世に還来して衆生を化益して下さる様をあらわされた言葉に

おんりんごうぢもん  
蘭林遊戯地門との言葉がある。何やら生前に子供が遊戯して居つた有様、死ぬきわまでもおもちやをして、——死のきわまでも母親の団扇を引きたくつて『居ない／＼バア』をして死んで往つてしまつた。何やら生死煩惱の蘭林に出

## 親 鸞 聖 人 と 私

### 一、開かれていた救済の道

私の郷里は、鹿児島県の片田舎で、いわゆる薩摩門徒と云つて、今日でも信心深いところだ。明治の維新があるまで、薩摩藩は真宗を禁圧する政策をとりましたので、先祖たちはかくれ念仏と称して、壁とか家具にしかけをしたり、いろ／＼しらべられてもわからぬように御本尊をかくして、ひそかに念仏を伝えてきたのださうです。私の子供時代にはまだいたるところにその形跡が残つていて、山肌の岩壁とか洞窟にきざまれた仏様などをよく探検に行きました。

もっとも宗教自体については、無関心というより、あん

て来て、遊戯しつつ知らせてくれたとようにも思いますことである。多大の皆様の御同情を蒙つて感謝極まりの無いことでもあります。

(大正八年九月七日・求道会館にて)

## 川 畑 愛 義

なものは非科学的な迷信だときめてかかつていたように記憶します。ところが、小学校六年のときに教わつた上原覚市という先生が、非常に宗教的な人で、心の眼を開けば喜んで死んでいける／＼というような話をときどきしてくれました。子供心にもその先生の話が大変印象的で、その時以来、死の恐怖とその解決という問題が、大きな心の中の重荷になつてきたように思います。

中学時代の日記をみると、いたるところに「真理を求めろ」という文句を書いています。心の眼を開けろ」という上原先生の教訓は、真理を求めることによって得られると考えていたのでしよう。高校から大学時代を通じてこの問

題はずっともちこされ、京大の医学部時代に「京都学生親鸞会」の同人になりました。親鸞聖人という人にふれるのは、それがはじめてでした。この会の指導者の一人だった池山栄吉先生（当時大谷大学教授）には、ひところ日参して講話を聞きました。先生の臨終の時には、家内がその亡きがらを最後までお世話させてもらったほどです。

池山先生のお導きなどによって「歎異鈔」を通じて念仏の道を教えられ、多年重荷としてきていた人間救済の真理に出会ったといえます。

「念仏はまことに浄土に生まるるたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべらん、総じてもて存知せざるなり。たとい、法然上人にすかされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずせうろう。そのゆえは、自余の行をはげみて仏になるべかりける身が、念仏を申して地獄におちてせうらわらばこそ、すかされたてまつりてという後悔もせうらわめいずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」

この「歎異鈔」第二章の言葉が、私の宗教的覚醒の契機になりました。

親鸞聖人の生き方には、時代を超えた普遍性があります。しかも他の宗教よりも自然科学的な色彩が濃く、反面、信

も出来ませんでした。二、三の友は、やはり同じようなことを問題にして、絶望のはてに自殺するほどだったのに、いっこう私はそんな気持ちになれませんでした。ですが医学の専門にたずさわっているうちに、おくれればせながら無常が実感されるようになりました。というのは、よく「健全な精神は健全な肉体にやどる」と云いますが、その健全な肉体とは何か、またそもそも健全なものとは何を基準にいうのかということを思うのです。

人間一人の肉体細胞の数は約四兆、脳細胞関係だけでも百四十億といえます。この細胞はたえず生まれ、たえず死んでいく。つまり人間の生命もたえず生死をくり返えず「死の上に立つ生」にすぎないということです。デカルトは「われ思うゆえにわれあり」と云いましたが、その〃思い〃すら考えてみると刻々に変化しているものにすぎません。つまるところ人間には不変なものがありえないのでしよう健全と云い、絶対といっても、本質的にそのようなものは人間にあるはずがないと云えましょう。

### 三、先輩を謙虚に学ぶ

現代が不安の社会だということがよく云われます。しかしその一面生活水準はたかまり、ある部分は繁栄とまでいわれています。けれども、その生活の内面はどうでしょう。生活のよりどころになっている家庭にしても、団葉な

心はまことにアカぬけしていて、弁証法的だとすら申せませす。「たとえうそであっても」と念を押しておいて「たまされて地獄におちても後悔はしない」「もと／＼私は罪悪深重、煩惱熾盛の人間だから……」といわれる。これは人間の正体をおそれずに凝視した仏（覚者）だけが告白できる言葉でしょう。

自分は念仏がうそかまことか知らない。しかし「念仏にまさるべき善なきゆえに……弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきゆえに」という伝承と身の証しをたまわっているといわれます。〃我の行〃はいかんともおよびがたい。「我」が破れるとは、空無我になることでしょう。自分のすべてをなげだして、みずから念仏申す身証を實踐していくところに、自己を「空」にする絶対の願力が、救済の道として開かれているのだと思います。

行きあたり つきあたりして つまづきし かべはみえずも 光かざさん

### 二、ひとり得なかつた無常観

宗教の世界へのみちびきには、私は無常観と罪惡観の二つがあるように思います。医学生時代のことでありますが、私はよく机の上に頭蓋骨を置いてじつと対面するというようなこともやりました。けれども、しぶとくて不真面目な上に、多情な性格のためか、いっこうに無常観にひたること

どというしつとりした鬱悶気は、テレビなどにうばわれて落ち着く場所がありません。いってみれば、今日は孤独感の非常に色濃いつ時代です。この無人の砂漠をさまようような孤独感や不安は、社会の指導原理をはっきり打ち立てると同時に、人間の尊厳性を回復する道を見出していく以外ないように思います。それには今日精神衛生学というような人間の問題にとり組む科学の足がかりもつけられてきて、成果が期待されますが、それとともに

われなくも法はつきまじ和歌の浦の  
あおくさ人のあらんかぎりは  
と詠まれたという親鸞聖人の教え、先輩の残してくれた精神的遺産を謙虚に学ぶことが大切なのではないでしょうか。

### 随想

三瓶 徳英

よしあしを思いつ言いつ行いつ念仏にかえり今日も生きな

明日の日は如何あらんとも弥陀仏の御意にまかせてやすけ

くねむる

明け暮れに怒り腹立つ凡夫われ弥陀おもう時心はなごむ

人と法について

榊原徳草

時折り思うことですが私などはいつも自分のことが先きに出てくるのですが聖人はあまり御自分のことを残されてないということ。試みに聖人が御自分の名をもって書かれたところを御本典から拾ってみます。

総序 ここに愚禿積の親鸞、慶はしき哉や、西蕃月氏の聖典、東夏日域の師釈に遇い難くして今遇うことを得たり云々。

別序 ここに愚禿積の親鸞、諸仏如来の真説に信順して云々。

信巻 誠に知んぬ悲しき哉愚禿積、愛慾の広海に沈没し云々。

化土巻 是を以て愚禿積の鸞。論主の解義を仰ぎ、宗師の勸化に依りて……果遂の誓い良に由有る哉。

全上 然るに愚禿積の鸞、建仁辛の酉の曆、雜行を棄て、本願に帰す云々。

大部の六軸の御本典の中から一寸拾い出して見たのです

右のように歎異鈔に出てくる聖人自ら「親鸞」と名告られての御言葉は数ヶ所しかありません。

その他の御著書、和讃など精しくみませんが、右のように「教行信証」と「歎異鈔」とを通じてみますと、聖人が御自身を挙げて「私は」と話される所は、まことに寥々たるものであって、その他は法の真実、機の真実、つまり世界の真実と人間の真実を永遠の相において、又十方世界の広さにおいて語っておられます。

聖人には所謂「自叙伝」というようなものはない。一番それに近いと思われ厳しく胸を打つ文章は先にあげた御本典、化土巻の承久の法難の場合一ヶ所のみであります。

「真宗興隆の大祖源空法師並に門徒教輩、罪科を考えず、みだりがわしく死罪につき、或は僧の儀を改め姓名を賜うて遠流に処す、予はそのひとりなり。しかればすでに僧に非ず、俗にあらざ、是の故に禿の字を以て姓となす。云々」

と悲痛な御流罪の時のいきさつを簡潔に強い文章で述べられ、禿の字を称して非僧非俗を宣言されておられます。

このあとに「然るに愚禿積の鸞、建仁辛の酉の曆、雜行を棄て、本願に帰す」と述べられ、それから御師匠法然上人からおゆるしを頂いて選撰集を写させて頂いたことや、それに内題の字と「南無阿弥陀仏、往生之業、念仏為本」

が、右にあげた程しか聖人が自ら名を冠して「私は」と仰言ったところは見当りません。他はすべて釈尊や諸々の祖師達の仰せを引いたり、法の真実や人間の迷いの姿しか語っておられないのです。

も一つ歎異鈔から聖人自ら名告られた所を伺ってみますと次の通りです。

第二章 親鸞におきては、ただ念仏して云々

第五章 親鸞は父母孝養のためにと一辺にても念仏申したること候わず云々。

第六章 親鸞は弟子一人も持たず候云々。

第九章 親鸞もこの不審ありつるに唯円房おなじころにてありけり云々。

第十三章 さてはいかに親鸞がいうことを違うまじきとはいうぞ云々。

後序 弥陀五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり云々。

「釈緯空」とを御師匠様が直筆で書いて下さったことや、又上人のお姿の御画像を写すこともお許しを得ていられること、又それに「南無阿弥陀仏」と「若我成仏十方衆生稱我名号下至十声云々」の御真筆で替をして頂かれたことなど、御師匠法然上人と聖人とのお姿が恰もものに憑かれたかのように喜びと感謝とで一気呵成に強く温い文章で眼に見えるように書かれております。私はこゝを常に感激して拝読し聖人がいかに御師匠様に身心のすべてをあげて帰しまつられておられるかに頭が下がりが胸がせまるのであります。

ところが聖人が人間的なことを述べておられる所でありますが、しかも人間的といっても、そのまま法の真実の中で話されておる親鸞聖人であり、決して俗情に喘ぎ自己に泣いたり喜んだりしておられるところは一つもありません。私はつくづく感ずるのですが、私などは常に何が中心になつて生きているのか、従つて何が中心になつて死んで行くのかという、それは「私」が中心であり「おれが」と

いう我が主軸をなして生きており、それが死んで行くのでありましよう、なまけないことですがこれが日常であります。聖人と私を比較するのは大外れたことでありますがしかし歎異鈔に出てくる聖人若かりし御時の念仏房勢観房との信心の論争のお話、結局御師匠法然上人の御前に出て裁決を仰ぐ同一信心のお話から申すと「善信房が信心も如来

より給わられたまいたる信心なり……されば一つなり」の条は、只今聖人と私との間に智慧才覚の点では論外であっても、如來より賜った信心だとすれば、聖人のお念仏も私のお念仏も「ただ一つなり」でなければならぬ筈であります。然し私には常に自我中心の生活しかならないのに聖人には自我とよぶべきものはなく法の真実を照らし出された親鸞という個人が出てくるのみで、言い換えれば法に入るための名告りとしての聖人親鸞があるだけであります。聖人は人間的な俗臭を帯びた意味で御自分を呼称されるところは全くない。少しばかり人間的な影が写っているのは先にあげた承久の法難の時の「予はその一人なり」だけであります。しかも直ぐ「然れば即ち僧に非ず俗に非ず」と宣言され、忽ち真実の法界に悠々と転化したお姿に変わっておられます。真実へのき、つか、かけとなる名告りか、又は真実が具現した生活の姿としての自己呼称の「親鸞」か、いずれかであって全くの愚痴の主宰する呼称「自我」の丸出しは見当らない、全然無いのであります。

聖人の自己呼称は、だからそのまゝ転じて権化のお姿としての主体であります。私などのそれは煩惱のかたまりそのものの主体我そのものであります。煩惱には常に力味があります、調子の好い時はすら／＼と時が移るが、この好調子たるや実は煩惱にかまけているのであり、懈怠放任

かない一番大事な「私」これが一切の問題の源泉で、これをどうにかせねばならない、捨ててもならず変革もならず、この怪物の処理であります。

この我さえなければどんなに楽であろうと思ったことは今に始まらない、若い時からです。こんな理屈に合わないこと、愚痴とか、矛盾とか、そういうものを抱きながら「おれが」は生を続けるのであります。

かかる怪物自我が、無我になればよいのです、無心になつて幼児のようであれば問題はない、迷妄の自我の堅壁である精神が純一無雜になればよいのだが、容易にこれに始末をつけることができない、念仏申しても、お慈悲を思っても、枝葉末節は調子がでて、かなめの主体である我は仲々片附かない。

ここに唯一無二の道そのものとなつて名告られるのが聖人親鸞であります。歎異鈔第二章「親鸞におきては」又第九章「親鸞もこの不審ありつるに」御本典の「悲しきかな愚禿」等々の、人格となられた聖人、ここが困りきつた自我の通路となつて下さるのです。「我」の取れないで困っている生きた私に、その私を相手にして通路となつて下さるのが「名告られる聖人親鸞」であります。

困り果てている者を呼び入れて、その困り果てゝいるものと「一つ」になり、屋内に招き容れて下さるその道その

であり、およそ念仏圏外に遠く、迷走妄飛の時が大部分であります。

平生業成とは、平生に業事が成弁してお念仏に潤うている姿でありましょう。頭の一角で言葉だけで成弁し空転してそれで済むのではない、大悲の願船に乗じて光明の広海に浮ぶ姿、身柄一杯に大悲の雨に安らい、かかわりなく、むなしさなく、逃避も憧憬もなく、お念仏一つで心身一如に充実した光りある生活、善もほしからず悪もおそれなしの生活が、平生に業事成弁した姿でなければなりません。然し現実の生活自体は疲れと孤独、孤独とは思ふようにならぬ愚痴の我が姿であります。寒々とした自我のわびしさの果ては瞋りとなり乱れおののく姿となります、悲しい哉これがまことの私の日常であります。

これらは「我」が中心であり「おれが」が根本なのです。自我というものは、などというところの観念で論議して処理できることではなく、日々夜々綿々として生き続けている私自身、いのちの具体化する一個の私自身、その私なのであります。生きていることが我なのです。気違いになるか死ぬかすれば一応「我」はなくなりましようが、どんな状態であろうと普通人間として生きることにはそこに自我があることであります。一番処置に困る、最も手に負えないのが自我「私」なのです。古今東西にわたつてたった一人し

ものが聖人です。人と対するには人となつて下さる。それはそうではない、こうであると言いきかせても解りつこのない私を、只一つ導き入れ堂奥に安座させて下さる、念仏の妙味にひたらせて下さるのは、ひとえに「人」となつて頭れて、困っている「人」と「一つ」になる御方、我々にとっては自らを名告られる御方「親鸞」が唯一無二の救い手であります。

大部の御聖教の中に、広く言えば釈尊の説かれた一切の經典の中に、私に道をつけてくれるのは「人」であります、特に私にとってそれらの最初の道となつて下さるのが、つまり闇夜の灯となりきつて下さるのが名告られる「聖人親鸞」であります。この聖人も御師匠法然上人に対し「好き人の仰せを蒙りて信ずる外に別の仔細なきなり」と寄りきつておられます。恰も法然上人が「ひとえに善導に依る」と寄りきつておられるように。

「親鸞におきては」「親鸞は」「親鸞も」「親鸞一人がため」等々の数少いけれども、これこそ私にとって唯一無二の念仏に入り且つ還る門戸であり道であります。

人を通じて初めて法に遇えるのです。私という一個の醜悪なる人間が、人となつて現れた法の具体化する人、親鸞聖人に遇うて、その御方が人の面で私なる人に同じて下さる、そこに真実があるのです。迷える私が直接法の真実に

立向ってどうして真実と会えましよう。盲人には光りを見ることができない、光りということや、その内容の説明は判っても依然として盲人の眼に光りは宿りません。その盲人なる我れに、盲人と同じ姿に化して下さる目明きの御方こそ「人」となられた聖人であります。迷える私との唯一連なりとなって下さるのが聖人であります。

法は独り興らず、人によって興る、と言います。法が法のまま下り立っても盲人には見ることができません。迷いの凡夫には無縁であるのを、大智者はしろしめして人となつて下さるのであります。法性の都から方便法身の阿弥陀仏となつて下さつたのも、迦耶城に応現して釈迦牟尼仏と顕れて下さつたのも、仏という自覚せる人格者となつて下さつたのも、我等の無眼人、無耳人を「かねてしろしめして」私に法の方から下り立って下さるのであります。

このように人と現れた聖人を拜しますと聖人はそのまま阿弥陀仏の権化の御方であります。一足とびに申せば聖人に遭うことは阿弥陀仏に遭うことになりす。聖人は一方で私の困りきつた「我」に「親鸞」と現れ、同時に法の真実そのものの「親鸞」となつて念仏一つになつて下さるのであります。

人生六十年、孤々の声をあげてから今日に至るまで、また死の最後の瞬間に至るまで私の生は迂余曲折を辿るので

のお蔭なればこそ今日懈怠放逸の身ながらこの御方のあとを、その聖人の影をふみつゝ南無阿弥陀仏一つでお伴をさせて貰えるのだ、とひとりたたずんでしばし感激の頭を垂れたことです。

「よき人の仰せを蒙りて」いのちは輝くのであります。人を通してその人の中にみなぎる法の真実が私のいのちに流れ込んでくるのです。人と法とは二つであつて実は一つであり、その一つは私とまた一つであります。一つになりたくてたまらない人、聖人はそういう御方であります。

さて、よき人に遭う幸せに生きて、従来の生涯に一転回を得ても、どこまでも人間は人間であつて迷いはつきものです。死の刹那まで何かにつまずかねばならぬように仕組まれてるのが迷妄の凡夫の証拠であります。

池山先生が或る時の御講話に「……その時聖人はフト姿を消される……」と申されたことがあります。よき人、聖人にありとあらゆる光りのすべてを拝している者にとつて晴天の霹靂であります。知らぬ間に「人」に執っていたからです。姿を消された聖人、それは私に前向きになつて語り続けていられた聖人が、スッと後向きになつてしまつたともいふのでしようか。然しここで私から姿を消された聖人は実は私の中に消えてともに如来様に向つてお念仏していられる。人の姿を私の内に消して「ただ念仏して

す。過ぎた生涯を顧みれば「自我」のまずしい跡、空しい力味の影、恥ずべきことどもで塗り尽くされていきます。一個の人としての歩みのいかに貧しい姿であつたか、そしてこの同じ一個の人間、私の自我はこれから死の終焉まで同じ跡、否もつと加重された惨怛たる跡を踏み続け、速度と分量もいよ／＼増して行くことでしょうか。かかる一個の人間に理解や記憶や、普遍とか絶対とかいう人間の一部分の活動でどうして解決がつかましよう。たとえ我々の理性や感情が活動して人生を造るにしても、否それらは人間として最も必要な要素ではありませんが、それらがまことの活動を行うには、一個の人間としての私が活動せねば生きていく私にはなれません。一部の細胞や、刹那の感情の部分的な活動でなく、私が全体活動を確固として行動するには人に遭わねば、よき人の仰せに生きねばそれは不可能であります。

今年の三月の或る夜、ある謝恩会のすんだあと、私は京都の夜の街を一人になって歩きました。あてもなく歩いてフト見ると六角堂の前の通りに出たのです。徳々忙々の中の或るとぎれた一瞬に、私は聖人二十九才のあのよき人に遭われる前の苦闘の果てに至らんとする祈願のお姿に行き当つたのでした。聖人のそのときの御胸中を思い、にわか

に胸が塞つて思わず合掌しお念仏が流れました。この御方

弥陀に助けられまいらすべし」となられたのであります。私の内に消えた人間聖人は今度は如来聖人となつて、お念仏の光りに影を消されてしまうのです。ここには皎々と輝く「ただ念仏して」の満月が光りを降りそそぐのみの世界になりました。姿をとつてあらわれたよなき聖人、そのお蔭で姿を消された聖人のお慈悲が、直接如来様から「南無阿弥陀仏」となつてクッキリと拝されることになりました。

こうした念仏生活は、しかしまた聖人の御厄介になつては息を続けるのです。それは念仏がまたしても空転するからです。念仏が空転するのでなくて私が空転するのです。すると聖人は忽然と姿をあらわし私に向き合つて下され、「親鸞もこの不審ありつるに、徳草同じ心にてありけり……よろこばぬにていよ／＼往生は一定とおもいたまうべきなり」

と、手を振り膝をすゝめて抱きかかえるようにお念仏を口移しにして下さる。

禪の趙州從諗禪師は七年間の長い間、禪立三昧に住したと伝えます。羨ましい限りですが、私などは念仏三昧の生活はすぐに乱れて終います。しかし、その乱れて終うどこかでよき人があらわれて下さつて「徳草さん、かくの如き

の吾等がためなんですよ」と、再び念仏の光りに転化して下さること、これひとえによき人に遭わせて頂いたお蔭であります。

## 仏かねてしろしめして

よき人の仰せにききて御名を呼べば  
オネガイ 正念直来

(四〇、八、二八)

### 松村繁雄

#### 噫 歎異抄の第九章

私が悩み悶えた末、はじめて仏の真実に気づかしていただいたのは歎異抄の第九章の「仏かねてしろしめして」の一句でありました。爾来五十年、この無常の世を今日まで生かして貰っておりますが、その間、つまりは転び、或は立ちすくんで途方に暮れたことは幾度であったか知れません。然しそのたびに、その私を引き起して下さったのもこの「仏かねてしろしめして」の一句でありました。今、七十の坂にかかって私の旅路もあと僅か、そういう今宵が終点であるかも知れぬと思うと、この一日こそ、私にとつては最高の悔い無き満悦の一日でなければならぬ筈であります。実際はというと、正反対で、老いて愚痴はいよ／＼募るばかり……よろこぶべきことをよろこばず

……それは／＼悲しい私であります。「兎の毛羊の毛のさきにいる塵ばかりも造る罪の宿業にあらずということなし」とも、「煩惱熾盛、罪業深重、地獄は一定すみか」とも、「さればそくばくの業を持ちける身にてありけるをたすけんと思し召したちける本願」とも、くりかえし聞かせていただき、それも、「弘誓の強縁によつて聞かせていただいたのである」と聞かしていただいてみれば、この上は、天におどり、地におどつて仏恩の深さを喜ぶべきことであるものを、しかも旅路はいよ／＼終点に来て今宵も知れぬいのちをもつのであるから——さてそうならば、惜しいも欲しいも可愛いも憎いもすべて力なくして終らねばならぬものを——

—それ故に大悲の御涙をそいで下さるものを——それだのに、徒らに有無善悪にかかわりはてて大悲の親心をよろこべぬということは一体どういうことでありましようか。

猫は小判よりもネズミを欲しがりますが、私はお慈悲よりも此世のネズミが欲しいのであります。然るに、その欲しいネズミがなか／＼思うにまかせぬ私であります。世間には、財産に、健康に、幸運に恵まれている人があるのに自分はどうしてこのような貧乏神にとりつかれるのか？

長男には先立たれ、一人の次男は痲疾で倒れて、貧乏は疾風のように追っかける——と思うと、悲しくて淋しくて仕様がな。これも自分の宿業と一応は諦めてはみるけれども、その下から「なさない」という愚痴が頭をあげる。

「そういうなさない奴を不懲に思うて下さるお慈悲」とそこにお慈悲を引っぱって来ても、火傷に油を塗ったほどのさき目もありません。

よく／＼考えてみれば、この私は「ネズミが欲しい」ということだけしかない。たま／＼ネズミが沢山手に入ると——それも他人のネズミと比較して、おのれのネズミは多いと——それをよろこんで、仏様のお慈悲は更によるこぼうとしない私であります。

悪性さらにやめ難し、心は猫のごとくなり  
ネズミが欲しいだけ故に、仏恩よろこぶ心なし

七十といえは古稀、古来まれな年であるといわれます。その年になり、明日をも知れぬ身でありながら、この始末であるとは、あきれはてるばかりであります。久遠劫より流転せる苦惱の旧里——猫の根性——は捨て難く、いまだ生れざる安養の浄土——仏の境界——は恋しからず候ことよく／＼煩惱の興盛——猫の性分——に候にこそ。

この私の全体を、かねてしろしめされて「煩惱具足の猫のお前ぞ」と仰せられて、その私を「見捨てぬぞ、ことに憐れむぞ」とのあなたのお呼声であります。

今や、世くだり、人つたなくして、いよ／＼自性唯心に沈んで（ネズミだけを追い求めて）、徒らに浄土の真証をおとしめ（仏の呼声を聞こうとせず）。或は定散の自心に惑うて（ネズミの大小を争うて）金剛の真信にくらし（仏の真実をよろこぼうとせぬ）。そうした渦巻き、私を舍めた渦巻の只中に居ります。

仏教興隆の声もありますがその動きもややもすれば「ネズミ捕」の手段におちてはいますまいか。どこまでもネズミを追いかけて仏の方に心のむかぬ私、この逃げる者をはなし給わぬお慈悲、まことに繁雄一人がためであります。

仏のお呼声がなければ一日も一刻も生きられぬ私、歎異抄のこの九章がましまさねば片時も生きられぬ私であります。噫！ 歎異抄九章なるかな。

# 法蔵菩薩の四十八願 (二)

花田正夫

これまでの十六の願を拔苦与樂の願と呼ばれておりますはてしのない生死の大海におのが罪から沈みきつて浮ぶ瀬のない私共をかねてしろしめして悲心うむことなく、一の願みなこれ衆生のために建立せられたのであります。

これから次の四つの願は、衆生往生の因の願と呼ばれ、私共を浄土に生まれしめようとの大切な願であります。どんなに莊嚴された浄土も、そこに生れる衆生が無ければむなしとところであります。ことに第十八の願には、「若し生れずば正覚を取らじ」と、御自身のいのちをかけたものとされてのお誓いが異様な光明を放って私共の心にひびきま

## 八 往生の因願

十七、設い我れ、仏を得たらんに、十方世界の無量の諸仏、悉く咨嗟（ほめたたえること）して我名（南無阿彌陀仏の名号）を称（ほめあげる）ことせずば、正覚を取らじ。

我身の愚鈍さと仏慈の無窮さに何時も心うたれます。

幸に私共は念仏の流布している日本に生まれましたが、それを聞きながら、蟹は自分の甲羅の大ききだけの穴を掘るように、夫々の自分の思惑で千差万別の判断をしておりますが、結局それは盲人の象見物で一つとして正鵠を得られません。ここに有縁のよい先生方に導かれて、月光で月を仰ぐように、仏心のひかりを受けてはじめてその真意を頂くことが出来るのであります。そうした目に見える有縁の人々や種々の事象の背後に、諸仏称揚、咨嗟の本願の誓いの力が仰がれるのであります。聖人が「たま／＼行信を獲ば遠く宿縁をよるこべ」と随喜せられたのも、深く遠い、数限りのない諸仏の御恩とこの御本願を、随喜せられたのであります。

十八、設い我れ、仏を得たらんに、十方の衆生、至心（まごころ）に、信樂（しんげう）（しんじてねがいもとめる）して、我國に生れんと欲して、乃至十念（十声の念仏から一生涯の念仏まで）せん。若し生れずば正覚を取らじ。唯五逆（殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、出仏身血）と正法を誹謗せんをば除かん。

この願は王本願と讃えられ、四十八願の中心の願であり

この願を諸仏称揚の願、諸仏称名の願、諸仏咨嗟の願、また往相廻向の願、選択称名の願とも呼ばれます。十方世界の無数の諸仏がごとごとく弥陀仏の不思議な徳をたたえてあらゆる衆生に知らして下さるのであります。かくて私共の眼をひらいて浄土をねがう心をおこして下さるのであります。

さて菩薩がこの願をお誓い下さる御心をひそかに推測いたしますのに、私共は煩惱に眼が障えられた盲人で、真実を見る力がありません。念仏を聞き、称えましても、猫に小判、豚に真珠で、人界に生れながら、室の山に入って手を空しうして帰る外はありません。このかたく塞ざされた眼を開いて下さるには、一仏二仏のお励めでなく、十方無量の諸仏の繰り返しまぎ返しての讃仰の声によって、点滴が岩をうがつに似た御苦勞が続けられねばなりません。阿彌陀経を拝読申す時、東西・南北・上下の六方の諸仏が異口同音に弥陀仏を証誠していられるところに参りますと、

者

ます。阿彌陀仏の誓願の不思議な御力で、お浄土へまいらせて頂けるのだといただいて、すこしの疑うところもなく、あゝ有難い南無阿彌陀仏と称えましようとの心のうちに思い立つのをきっかけとして、十声であれ、一声であれ念仏申す者を、若しも浄土に生れしめ得ないならば、仏とはならない、とのお誓願であります。

しかもそのお呼びかけは、十方の衆生で老少善悪をえらばれないのであります。へだてとあらそいのほかにない世界に、唯一無二のおへだてのない御真実心の顕現であります。かゝる大慈悲にあうて、五逆の罪を慚愧し、正法を諍る大罪をおのずと廻心せしめられるのであります。このことはとりわけ積尊が御心配下さって、悪くてもかまわぬというような横着心におちないようにとねんごろにお勧め下さるのであります。

十九、設い我れ、仏を得たらんに、十方の衆生、菩提心（仏のさとりを求め、衆生を救うことを志す心）を発し諸の功德（いろ／＼の善根）を修め、至心に発願して我が国に生れんと欲わん。寿終るときに臨みて、仮令大衆と圍繞して、その人の前に現せずば、正覚を取らじ。

この願を修諸功德の願と呼ばれ、王本願の真実心（まごころ）を聞き

ながらも、自身の真実の姿にも気付かず、わが力をたのんで善根を積んでその力で浄土へ生れようと願う者を悲憫されてのお誓いでもあります。

○ 私共は相対五分五分の根性でかたまっております。即ちこちらがよくすればこちらもよくして下さるといふ心であります。こちらが善を積むから仏様も迎えて下さるだろうときめて、仏法の上や、世間のことで、善根を積み重ねてたすかろうとするのであります。ところがこの道は難渋極まるのであります、というのも、少し善らしいことをすればわれよしと慢心をおこし、若し出来ない時はつまらぬ／＼と卑屈に沈み、はてしない流転をさだめといたします。我慢の強い私共は、性こりもなくさすらい続けますが、それは恰も、長い竿を振って或は屋上で、或は山上で空の星をおとそうとする子供の愚に等しいことをしるしめず仏は、その人の臨終に、その愚かしさとむなしさを御自ら姿をあらわして気付かしめたいものとお誓い下るのであります。

二十、設い我れ、仏を得たらんに、十方の衆生、我が名号を聞きて念を我が国に係け、諸の徳本（念仏のこと）を植え、至心に廻向（称名の功德を浄土にふりむけ、まいらする心）して我が国に生れんと思わんに、果遂（は

### 〆往生の果願

二十一、設い我れ、仏を得たらんに、国の中の天人、悉く三十二天人相（仏のよきすがた三十二種）を成満せずんば正覚を取らじ。

この願は具三十二相の願と呼ばれ、往生成仏のあかつきには釈尊と同じように身体に三十二の端相がそなわるようにしたいとの願であります。

三十二相とは眉間に白毫の光明があり、掌は柔かく、足に千幅輪相があるというように、身体全体に尊い相をそなえることであります。世上にも、青少年の頃の容姿は親からうけたまゝであるが、中年以後は其人の責任であると言われますが、念仏往生者は、内なる徳が外にもあらわれて、地上の最も尊く美しい相貌とさせたいとの、法蔵菩薩のお誓いでもあります。

二十二、設い我れ、仏を得たらんに、他方仏土の諸の菩薩衆、我が国に來生して究竟（菩薩の位をきわめる事）して必ず一生補処（一生を過ぐれば仏処を補うべき位）に至らん。その本願自在の所化（本願の自在のおはたらきて教化せられた菩薩）、衆生の為の故に弘誓の鏡を被て、徳本を積累し（功德を積みかさねる）、一切を度脱

たしとげること）せずんば正覚を取らじ。

この願は植諸徳本の願と呼ばれます。十九の願のように諸善に志していた者も、ようやく機が熟して、自分の力の限界も知ればじめて、大善大功德の名号に着眼し、それを称えることよって浄土に生れようと願うようになるのであります。

然し、切角念仏申す身にまで導かれながらも、称え心に目をつけている限り、よろこびもおこり、心やわらく時はこれでこそと思ひ、反対に何かの機縁で心が乱れる時は闇に閉ざされて行方を見失い、唯焦慮をむなく続けねばなりません。昔から、若存若亡の信と言われる所以であります。

聖人の二十九歳、常行三昧堂で、阿弥陀仏を中心に、念仏申されながら、遂に叡山を下られたのも、若存若亡の不安定さを如何ともする術がなかったからであります。かくて、法然上人を吉水に訪ねずいられないようになられた、この聖人を動かす根本の力が、この願の力の催しであります。世にこの願を果遂の願と讃えられる所以であります。称え心の如何を問わず、称える者をつには救い遂げずばやまじとの悲願の真実のあらわれであります。

以上、十八、十九、二十の願はあとで詳しく讃仰申します

（生死の海をわたし、煩惱を脱せしめること）し、諸仏の国に遊んで菩薩の行を修し、十方の諸仏如来を供養し、恒沙無量の衆生を開化して、無上正眞の道を立てしめんをば除かん。常倫（つねなみのともがら）諸地の行（十地の菩薩の修行）現前し、普賢の徳（利他大慈悲の行徳）を修習せん。若ししからずんば正覚を取らじ。

これを還相廻向の願とも一生補処の願ともいわれます。その国に生れる者はこの一生ですぐ仏のさとりをひらく身、菩薩として一番上の位にさせたい。但その菩薩が衆生済度の願を建て、煩惱の世界に帰って普賢の働きをしたい者には、娑婆世界に帰れるように自由自在な力を与えたいと云う願であります。

白井成允先生が御母堂を亡くされた時、「天なり命なり」との儒教に安じられず、又「天国に生れる」キリスト教にも落着かれなかった時、歎異鈔に「念仏していそぎ仏になりて思うが如く衆生を利益すべきなり」とあり、又「いそぎ浄土のさとりをひらきなば、六道四生のあいだいづれの業苦に沈めりともまず有縁を度すべきなり」との聖人の仰せに驚喜せられて念仏門に入られましたと承つております。この還相利他のお誓は、地上如何なる教にも聞くことの出来ない德音であります。

五福(169) 一(174)

本派の大徳、雑質法頼師の辞世の詩に  
往生の一路、平生に決す  
今日何ぞ生と死を論ぜん  
蓮華界裡のたのしみを好むに非ず  
娑界に還来して群萌を化せん  
と還相の願を渴仰していられます。

二十三、設い我れ、仏を得たらんに、国の中の菩薩、仏の神力を承けて諸仏を供養し、一食の頃にあまねく無数無量那由他の諸仏の国に至ること能わずんば正覚を取らじ。

この願は供養諸仏の願と云われます。經典には無数の諸仏の名があげてありますが、この無数諸仏の国に到達して、僅かの間に供養出来るようにしたいとの願であります。仏は福田と呼ばれ、その福田に供養する者は自然に福德と智慧を得て、そこに自利利他の満足される道もひらけるのであります。

さてこの味いを念仏の上に頂きますとき、聖人は一切の求道者を御同行御同朋として尊びかしずかれました。愛憎痴慢の煩惱に狂う私共には、我他彼此のへだてと争いが絶えませぬが、そうした中であつて念仏無碍の光明は、仏の

ずんば正覚を取らじ。

説法如意の願で口業の徳であります。一切智とは仏の智慧であります。篤信の人の一言は身心にしみるものがあります。四国の庄松同行を困らせて恥ずかしめようとして三部経の下巻を取り出して「この御文を読んで見よ」と云うと、一字一字をおさえて「庄松を助くるぞ」と書いてあると即答しております。その外篤信の人の種々な言行が信心の智慧として伝えられますのも、この願の力によるものであります。信心成得の人は仏より言わしめられると蓮師も讃えられています。

二十六、設い我れ、仏を得たらんに、国の中の菩薩、金剛那羅延(天の力士のこと)の身を得ずんば正覚を取らじ。

これは身業の徳を誓われたもので那羅延身の願と云われます。さて私がこの願を心に深く刻まれましたのは、三河の妙恩寺さんが急性筋萎縮症となられ、次第に手足、腰首と力を失われ、現代医学では如何ともすることが出来ませぬ時、「私の身体は浄土に生れて那羅延身を頂くまでは……」との通信をうけました時からであります。次第におとろえて行く身体になり、誰からも慰められようのない時、この

一子として、如来の御弟子として一切の求道者と道を同じくするように私共を導いて下さるのであります。

二十四、設い我れ、仏を得たらんに、国の中の菩薩、諸仏の前に在りて其の徳本を現ぜんに、諸の欲求するところの供養の具、若し意の如くならずんば正覚を取らじ。

この願は諸仏に供養する時、天樂であれ、衣服であれ、香華であれ何でも差しあげることが出来るように供養の道具を自由に得させたいという願で、供具如意の願と云われます。

昔から弘法筆をえらばずと申しますが、能筆の人にはどんな筆を持ってても優れた字を書くものであります。又立派な調理師は平凡な材料で美味な料理をいたします。そのように、この願も、単に道具が多いというのでなく、どういう境遇にあつても立派な供養の出来る身にさせたいという願であります。無財の七施と云つて、財産はなくても心にゆとりがあれば言葉や顔色、目つきの上で布施することとは充分に出来るとの教も思い合せられます。

二十五、設い我れ、仏を得たらんに、国の中の菩薩、一切智(道と教とに了達したる智慧)を演説すること能わ

願の思召しがどんなにか心にしみましたことか。それにしても私自身も風葉の身を持ちながらな何時までも丈夫と浮かれていますためにこの願意を軽く読ませて頂いていたことを愧じ入りました。

○ さてこの願も結局は無常の身を持つ私共に、その障りによつて行きつまらない、病身をこえる力を与えようとの悲願であります。

維摩経の中に、或日阿難が釈尊の御病氣のために、街へ牛乳を乞ひに出掛けました。すると維摩居士があらわれてそのわけを聞きましますので、ありのまゝに答えますと、維摩は「馬鹿なことを言うものではない。金剛身を持たれた釈尊が病氣などされるはずがない。お前のような間違つたことをいうと、外道の者が、釈尊をさげすむであろう。我々が無常の身を持ちながら何時までも無事で居られるように思いこんでいるから、釈尊は病身を示されて我々を導かれています」とさしました。阿難はハタと行き詰つて居りますと、空中に声がして「居士の言われる通りである、然し人間の姿で出て居られる限りは釈尊も病氣せられるから、早く牛乳を捧げよ」と教えられた、とあります。これ病をも善知識とされる深い味わいがあります。

二十七、設い我れ、仏を得たらんに、国中の天人、一切

万物、こじじょう厳浄光靈にして形色殊特ならん。窮微極妙くわいこくめう（微をきわめ妙をきわめる）にして能く称量（ばかりしる）なけん。其の諸の衆生、乃至天眼を逮得せん。能く明了にその名数をわきまうること有らば正覚を取らじ。

これは所須しよすう厳浄こんじょうの願であります。その国に生れた人々の持っている道具が立派で比類のないものばかりで、天眼通をもった人もその宝は数えきれないほどにしたい、という願であります。

この願の思召しは、私共が毎日あれもつまらぬ、これも足りないといふ風に不平不満の生活を続ける身に信心の智慧をおあたえ下さって、一切万物の恩ということが知れるようにしたい、ということでありましょう。

蓮如上人は、一枚の紙をも仏物としておしいただかれました。長崎の東望療養所長の高原先生は、健康法の秘決は「水の味を知ることだ」と申され、又「御飯をいただいてたべることが栄養のかなめである」と勧められています。

善財童子の求道物語に、人生のいたるところに五十三の善知識を見出して随喜しております。信心の智慧は、現世において知恩報徳の益を与え、やがて浄土の浄らかな莊嚴の扉を開いて下さるのであります。

二十八、設い我れ、仏を得たらんに、国の中の菩薩、乃

篤信者の一言が万人の胸をうつという趣きがあります。

蓮如上人は「信心成得の人は仏より云わしめられる」とそのことを讃えていられます。九州の禅僧、仙漣和尚も、六連島のお軽同行を「お軽の歌は経のドラニである」と口を極めてほめられています。その歌に

聞いて見なんせまことの道はちつとも無理がないわいな  
重荷背負うて山坂すれど御恩思えば苦にならず  
等々一読して忘れられぬ味のあるものであります。

三十、設い我れ、仏を得たらんに、国の中の菩薩の智慧  
弁才、若し限量すべくんば正覚を取らじ。

智弁無窮の願であります。前の願では仏智から出る弁才をお誓い下され、ここでは弁才の智慧の無限なれとお願い下さるのであります。維摩経をひもときますと舍利弗をはじめとし仏弟子方が維摩居士のために難詰されて一言も出なかつたとありますが、そういうことの無いように、言葉も、そのわけがらもよく知っていて自在に語り得るようにしたい、との悲願であります。

法然上人が浄土宗を立教開宗せられた時、奈良や叡山の学者や大徳が一堂に会して大原問答となりました時、上の智弁無窮の前に皆俯伏されたとあります。「姿を見れ

至少功徳の者も、その道場樹どうじょうじゆ（仏がさとりを開かれるところにある樹）に無量の光色ありて、高さ四百万里なるを見知すること能わずんば、正覚を取らじ。

見道場樹けんどうじょうじゆの願であります。聖人が方便の願であると申されましたのは、念仏の大功徳を存分に頂き得ないで、浄土の辺地に生れた者も、仏のさとりを開かれた時の道場樹をはるかに拜んで、やがて遠廻りしながらも結局はそのさとりの中に導き入れられるようにしたい、との願意であるからであります。

昔、原始仏教では、仏像を描くことは仏を冒瀆することとして厳禁され、僅かに道場樹を描いて仏を象徴したのであります。ここに道場樹の光を見知することは、仏の徳光をほのかに拜すること、やがて機縁が熟して、仏のさとりをひらかしめるようにしたいとの願であります。

二十九、設い我れ、仏を得たらんに、国の中の菩薩、若し経法を受説（心に受け口に読む）し、諷誦（ふしをつけて暗誦する）持説（身にたもち、人に説く）して弁才智慧を得ずんば正覚を取らじ。

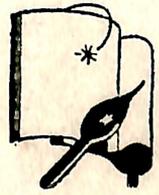
得弁才智とくべんさいちの願と呼ばれます。信の上からいよ／＼教法に親しみ、誦誦し聞法するとき自然に信心の智慧を頂いて、

ば法然上人、言葉をきけば弥陀の直説」と讃仰せられる所以であります。又、三河のお園同行が非常によるこびの生活をしていて、あちこちの人々があつまつて聞法しているので、本山の使僧が安心しらべに行くと、お園同行のあまりの無学さにあきれて「もう信心の談合をしてならぬ」と厳命した時、お園さんは涙を流して「御使僧さんさえもあきれはてるこの私を、あなた様なれやこそナー」と仏前に慚愧している姿を見て御使僧も「さすがお園同行だ」と非常に随喜したと伝えられます。

これは、学問のあるなしでなく、仏智を信ずる身に、万人のうなずかされる自然な弁才が無限に出るようにしたいとの法蔵菩薩の悲願であります。もとよりこの願も、浄土に生れた者の身にめぐまれる利益であります。その浄土の徳の照りかえしとして、信の上にこのように味わわせて頂きます。

更にこの願で思い浮べますのは落語界の名人、三遊亭円朝の逸話であります。或日天竜寺の滴水老師と山岡鉄舟居士に呼ばれて、落語を一席すませますと、老師から「舌先三寸の話だノ」と叱責せられました。その後鉄舟居士に導かれて根気よく法を求め、やがて心眼をひらいて、無舌居士の法号を老師から頂いております。落語もここまできて真に極意に達したと云えましょう。

（未完）



あとがき

瀝であります。皆様の座右におかれまうおすすめいたします。

この編集中に、京都の大字三右衛門さんの訃をききました。謹んでお悔み申し上げます。文字通り近角両先生を生涯の恩師とされて、念仏一筋をたどられた方でありました。

苦の娑婆や花がひらけばひらくとての一茶の句を逝く春の日の訃音に思い知らされます。

七十五歳の老躯をもたれて印度の救贖事業のためにニューデリーから二百キロのアラに出掛けられました岩本正樹先生は、室内で三十度、外は五十度の暑さの中で、御精進下さっています。先生の御健康をただに祈念申し上げます。

大乗の直応の地にまかれませし肯婆をおくらんみほとけのくに  
とは岩本先生の御出発の日お送り申し上げた腰折であります。

The India Center, The Japu Leprosy Mission for Asia, Taj Ganj, Agra, U. P. India

が御住所であります。

読書と教養

福島 政雄先生 著

定価 四八〇円

送料 八〇円

明支書房

振替 東京一四七五八三番

聞法録

白井 成允先生 著

定価 三〇〇円

送料 五〇円

百華苑

振替 京都二五七八八番

喜寿を迎えられました両先生の信仰の余

御案内

※毎月第一、二、三日曜、午後一時半、一道会例会。但し、五月、六月、七月に限り第二日曜を休ませて頂きます。

南区駈上町二ノ八八。市電新郊通り二丁目下車、東入ル三筋目辻左入ル。

※毎月二十四日、午前、午後。

昭和区小椋町、教西寺、法話会。市電、御器所通り下車。桜花学園東。風呂屋ノ隣り。

仏教は生きている

西元宗助先生著

定価 三〇〇円 送料 五〇円

永田文昌堂 振替京都九三六番

定価 半年 二百円(送共) 一年 四百円(送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八

編集・発行人 花田 正夫

電話 八二一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷人 本田 政雄

名古屋市南区駈上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番

慈光第十八卷 第五号 昭和四十一年五月十五日 発行(毎月一回十五日発行)  
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可